

## 一 兵卒

—— 辞苑閑話・一

## 工藤力男

一個人 ことばの変化は一筋縄ではいかないものである。

一 昨年秋から世話になっている内科医院の待合室に、「二個人」と題する雑誌のあるのが目についた。イチコジンか、ずいぶん堅い名前の雑誌だ、こんな所には釣りあわないなあ、と思って手にとった。表紙には、漢字表記の誌名のほかに「[ikojin]」とある。イチコジンではなく、イツコジンだったのである。

「個人」などということばは、恐らく明治維新、西洋文明と一緒に到来したもので、それ以前の日本語・漢語にはなかったに違いない。それなら、「個人」の内の「二人」ということで、当然「一・個人」という語構造だろうと考

えた、その見当がはずれたわけである。そして、イツコジンは変だなあ、若い者が助数詞のほとんどを「個」ですますことと関係があるのかな、と思った。

少し調べてみると、イツコジンを新しい語形と思ったのは自分の誤りらしいと知った。『日本国語大辞典』第二版（以下、『日国大』と略記）の「個人」の初出例は、馬場孤蝶『流水日記』明治廿七年三月三日条の「個人は確かに朽つるものなるか」で、補注には、「個人」以前は「二個人」「各個人」が多くみえ、それが略されて「個人」がうまれたのだとある。

佐藤亨『現代に生きる幕末明治初期漢語辞典』（明治書院

平成十九年)には、『東京横浜毎日新聞』明治十五年三月十五日号の「私個人にして」、明治廿年刊・有賀長雄『増補社会進化論』の「箇人の字大極図説の註に見えたれど」などがあがっている。そして、『明六雜誌』から西周の「個々人々」、津田真道『人權新説』から「各個人」、宮崎夢柳『鬼啾啾』から「一個人」をひいて、「個人」はこれらの省略形だろうという。

ヘボンの『和英語林集成』第三版(明治十九年)には、『IKKOJIN イッコジン 一箇人 n. (略) An Individual: one person.』とあり、個人にあたる語は掲出していない。『哲學字彙』(明治十七年)には、『Individual. 各自、個体、一個人』とある。

これについては佐藤喜代治『日本の漢語』(角川小辞典昭和五十四年)が詳しい。津田仙『英華和訳字典』(明治十二年)は、『an individual』に「一個人、ヒトリノヒト」、「Individual」に「独一個人、独一者、イチニン」という訳語を掲げているという。漢字の訳語は、この辞書の原典たる中国の英華字典の訳語であり、仮名の訳語はその和訳なのだという。そして、明治初年の加藤弘之の著作から「一個人」「各個人」、森鷗外『文づかひ』から「一個人」をひ

くなどしている。英語の中国語訳に由来するようである。そうだ、日本語の「一人、二人」にあたる現代漢語は「一個人、兩個人」であった。

一家老 江戸時代、藩主を補佐して藩政を行う重臣を「家老」といった。参勤交代制のもとで江戸家老と国家老があるなど、一藩に複数の家老があることが普通だった。そのばあい、筆頭の家老は「一家老」で、「イチガロウ」とよばれたらしい。一人の家老、イチカロウではないからである。筆頭家老・首席家老などともよばれたが、これらの「家老」は「ガロウ」と連濁したらしいので、一番家老がろうが約されてイチガロウとなったのだろう。

大きな組織、例えば警視庁の捜査担当部署はいくつかにわかれている。強行犯事件を担当するのが「捜査第一課」、その課長は、テレビドラマなどでは「イツカチヨウ」とよばれる。第一課の長「一課・長」であって、課長のうちの一人「一・課長」ではないのだから当然である。かかる呼び方は、「一班長」「一隊長」などにも行われるだろう。このように、本来の語形と音変化した語形で意味の異なることがある。

「一家老」においては、一人の家老をさすばあいには、「カロウ」という《本来形》が、筆頭という限定された家老には「ガロウ」という《変化形》が用いられたわけである。もっとも、これは語により、場によって異なるらしい。江戸時代、吉原では一番のなじみ客・最も大切な客を、本来形の「イチキヤク」とも、変化形の「イツキヤク」ともいったという。これは、下が一字漢語「客」である。同じく一字漢語の「一見」は、漢音と呉音の違いによつて「イツケン」と「イチゲン」ができたらしい。

さらに範囲を広げて考えてみる。「一転機」という語は、ある事態が「一転する機会」と、事態が「転ずる一つの機会」とでは、ずいぶん意味が違う。が、辞書はその違いをとかない。『日国大』は、「イチテンキ」を空見出しで掲げ、「イツテンキ」の項で語義を記述している。このたぐいには、「一頓挫」「一挙手」「一世界」などもある。

漢数字「一」が和語に冠したばあいにも音環境によって変化することがある。その一例に「一時」がある。前項が変化した「イツトキ」は、旧時代に一日を十二分した一つの時間、あるいは短い時間の意であり、後項が変化した「イチドキ」は、物事が一度にあるいは同時に起こるとき

に用いる。

後項が洋語、いわゆる外来語のばあいもある。「ページ」を例にいうと、「任意のページを書写する」のように数量をいうばあい、「二ページから三ページまで」のように順序をいうばあいがある。一方、「青春の貴重な一ページ」のように、特別な意味をこめて譬喩的に用いるばあいがある。この二つは読みわけて当然だとわたしは考えるが、現実はそうではない。『日国大』は「イツページ」だけを掲げ、「比喩的に時の流れの中で一つの場面をさしている」とするが、読みわけはしていない。

**一兵卒** 平成二十一年九月、民主党の代表選挙で菅直人氏に敗れた小沢一郎氏は、「わたしは初心にかえって、一兵卒として、国民の期待に応えるように、手をつないで協力していきたい」旨を述べた。ラジオによる小沢氏の声で一兵卒は「イツベイソツ」であった。

インターネットのフリー百科事典『ウィキペディア』で「兵卒」を検索すると、「兵士」のページに導かれた。そこには上引の小沢氏の挨拶がひいてあった。わたしは、その時以外の政治の文脈で「一兵卒」に接した記憶がある。そ

「YAHOO! JAPAN 知恵袋」で検索すると、「一兵士ってなんですか？（民主党の話題で出てきている言葉です）」という質問が、平成十八年四月五日によせられている。

その日付の朝日新聞朝刊をみると、第一面に「民主代表選 小沢・菅氏一騎打ち 立候補きょう表明」の見出しのもと、その前夜、鳩山会館の観桜会で代表選に言及しなかつた小沢氏に対して、菅氏は「一兵卒だろうが、かごかきだろうが何でもやる」と語った旨を報じている。小沢発言以前に接した記憶はこれなのだろう。

『日国大』が「一兵卒」にあげた三つの用例のうち、田山花袋『田舎教師』の「冷たく横はつた一兵卒の姿」を、『精選復刻近代日本文学館』（ほるぶ）でみると、「пейそつ」の振仮名がある。もっとも、音読みする漢数字以外は振仮名する総ルビ印刷なので、作者がつけたものではないだろう。残る二つ、徳富蘆花『思出の記』の「真理の一兵卒として」、高見順『過程的』の「階級闘争の一兵士たらんとする決意」に振仮名はないようだ。花袋には、そのものずばりの『一兵卒』という短篇もあるが、よみは不明である。

近代日本の軍隊に「兵卒」という階級はなかつた。「兵」は戦闘要員で、「卒」は兵を支援することが任務であつた。それを一つにして兵士の意味で用いているところに、わたしの違和感は発しているようだ。わたしの語感では、イッペイソツは最下級に位置づけられた「兵卒」であり、イチヘイソツは、兵卒の内の一人をさす語である。そして、「兵卒」がすでに最下級の兵士なのだから、あえて、「イッペイソツ」という必要はないと思う。旧陸軍には、上等卒と二等卒の間に「一等卒」もあつたので、なおさらそう感ずるようだ。

現行の辞書を見ると、「イッペイソツ」を掲出するものは多くない。『広辞苑』第六版は「一人の下級兵士。比喩的に、命令を受けて下働きをする者。（用例略）」と書いている。後半の記述は、まさに小沢・菅両氏の用例を説明するものである。『大辞林』第二版は語義を二分して、「①一兵士。②ある活動をする大勢の中の一人として、下積み任務に励む者。（用例略）」とする。これに対するわたしの疑問は、それなら「一兵士はイッペイシカ」ということである。

イチヘイツツ インターネットのサイト『青空文庫』から、近代の小説・評論・感想などにみえる「一兵卒」数十例が引きだせるが、読み方の明らかなものはない。その中から一つだけ、中島敦の『李陵』を取りだしてみる。一章の終り近く、李陵の軍が胡軍の猛攻撃をうけてのち、捉えた胡軍の捕虜の言について思案するくだりがある。

たかが一兵卒の言つた言葉故、それ程信頼できるとは思はなかつたが、それでも幕僚一同些かホツとしたことは争へなかつた。

この箇所で、この捕虜か兵卒のどの位置にあるかは問題にならないのだから、最下級の兵士を意味する「イツ兵卒」とかく必要はない。単に「兵卒の一員」と解していいだろう。作者は、「イツペイツツ」「イチヘイツツ」のいずれを意図したのだろうか。

各種の書目・索引類について、標題が「一兵卒」で始まるものを見ると、編者の読み方のしられることがある。ほとんど「一平」「一兵」の近隣におかれて「イツペイツツ」であることを語るが、まれに例外がある。『日本著者名総目録 2005 / 2006』④ 書名索引』（日外アソシエーツ 平成十九年）の「いちもくり」のページ (p.79) には次の

作品がある。

一兵卒の戦記 東京図書出版会（衛藤俊雄）

直上は「市辺遺跡」、直下は「いちべえぬまの101ちゃん」なので、「イチヘイツツ」であることがわかる。「日支事変」から三年間の手記である。B6判百五十二ページの本文中に「一兵卒」の語はみえず、奥付にも振仮名はない。この読みは索引編者の判断によるらしい。とまれ、わたしと同じように判断した人があったことは確かである。

インターネットの辞書サイト『実用日本語表現辞典』には、「いちへいそつ」の項目があり、次のようにかいてある。

「一兵卒」の意。一般的には「いっぺいそつ」と読む。援軍きたると喜んだのだが、続く記述は、「単なる一兵卒、しがない身分などを意味する表現。」と二種類の読み方をあげるのみで、その違いには言及しなかった。

二年前の三月五日、小沢氏が郷里の岩手県で講演した。その夜、十一時のラジオのニュースは「イチヘイツツ」と報じた。アナウンサーは山田タカユキさんである。

（平成二十五年三月五日啓塾）